

脳検査 (脳ドック)

脳にまつわるさまざまな疾患は、生活習慣病が影響している場合が少なくありません。そのため、メタボリックシンドロームと診断された場合や、高血圧・脂質異常症・糖尿病といった生活習慣病を発症している場合には、40〜50歳代になつたら1〜3年に一度は脳検査を受けておくとい良いでしょう。とりわけ、くも膜下出血を近親者が患った場合は、ま

ず30歳代に一度は受けられ、原因となる脳動脈瘤が無いかを調べておくとう安心です。

①MRI検査

MRI (核磁気共鳴画像法) は、水素が磁気に反応する性質を活用した検査機器です。X線検査と違い、被曝の心配はありません。頭部を輪切りにした画像から疾患の有無を調べていきます。頭蓋骨の影響を受けずに撮影できるため、CTだけでは見逃されてしまうような、隠れた脳梗塞や脳腫瘍などを早期に発見することができます。

②MRA検査

血管を立体画像として映し出す検査です。コンピュータグラフィックスの技術を応用して、血管の様子を三次元的に画像化することが可能です。くも膜下出血の原因となる脳動脈瘤の有無や、狭窄病変などを確認することができます。

③CT検査

MRI検査と同じく、輪切りにした画像を映し出す検査ですが、X線を使用します。脳内出血や脳腫瘍などを発見するこ

とができます。

④頸動脈超音波 (頸動脈エコー)

頸部の血管に超音波をあて、動脈硬化の進行度を測る検査です。頸動脈を全身の血管の鏡と考え、頸動脈におこっている変化は脳内動脈にもおこっている可能性があるとの前提で観察します。動脈が狭くなっている場合には動脈硬化が進行していることが疑われるほか、局所的に狭くなっている場合には、プラーク (コレステロールの塊) の存在が疑われます。プラークは放置すると脳塞栓の原因にもなります。

脳検査で異常が発見されても、すべて治療や手術の対象になるわけではありません。病変が軽度の場合には経過観察となりますが、症状を悪化させる因子となる、高血圧や脂質異常症・糖尿病といった生活習慣病を防ぐため、生活習慣の改善を心掛けることが大切です。

おわりに

人間ドックや健診は安心・安全な生活への第一歩です。健康な生活を送るために、今回ご紹介したオプション検査を賢く利用しませんか。

● 表 脳検査で発見できる主な疾患

脳梗塞	脳内にある血管が詰まる疾患。血管が詰まることで血流が途切れ、その血管の先にある脳細胞に酸素や栄養が供給されなくなることで細胞が壊死をおこし、運動・言語・感覚に障害が現れるほか、生命も脅かされる。
脳出血	脳の動脈が破れて出血した状態。出血した血液は脳内で血腫と呼ばれる塊となって、周囲の脳を圧迫することで生命に危険が及ぶほか、様々な障害が生じる。
くも膜下出血	脳を保護する3層の膜の一つであるくも膜と脳との空間 (くも膜下) にある血管から出血する脳出血の一種。発症すると死亡率が約30%といわれている。
未破裂脳動脈瘤	まだ破裂はしていない脳動脈の瘤。自覚症状が出ないために脳検査などでしか発見の手立てがない。瘤が大きくなると突然破裂してくも膜下出血をおこす。
脳動静脈奇形	脳の血管の生まれつきの奇形で、脳の動脈と静脈の一部がつながっているもの。放置しておくで静脈内の圧力が高まり出血する危険性がある。若年者のくも膜下出血では最も多い原因となっている。
もやもや病	脳内に異常な細い動脈が無数に作られる病気。
脳腫瘍	脳組織の中に異常な細胞が増殖する疾患。良性のものと悪性のものがあり、腫瘍により脳が圧迫されることで、慢性的な頭痛、吐き気、視力低下、けいれん発作、手足のまひなどが生じる。
大脳白質病変	加齢や高血圧、動脈硬化などが原因で、脳の表面にある無数の神経細胞で構成された灰白質に異変がおきた状態のもの。それ自体は病的なものではないが、脳出血や血管性認知症発症の危険因子の一つともいわれている。

今月の担当



保健師
中村 明日香

<参考文献>

『人間ドックへいこう』MMJ編集部 (毎日新聞社)、『がんをどう治すか』谷口直之・松浦成昭・三好英知 (中山書店)、『セミナー生活習慣病』田中逸 (日本医事新報社)